

Y4-15

当院における医師と助産師の役割分担に向けて

姫路赤十字病院 看護部¹⁾、
 姫路赤十字病院 事務部²⁾、
 姫路赤十字病院 副院長³⁾
 ○嶋田 有生子¹⁾、太田 加代¹⁾、中川 成二²⁾、
 赤松 信雄³⁾

【目的】厚労省は2007年12月28日付けで「医師及び医療関係職と事務職員等との間等での役割分担の推進について」を通知した。さらに助産師がより専門性を発揮できるように当院でも「院内助産・助産師外来」設立を考えており前段階として妊婦健診時のルチン検査オーダーの多くを助産師が代行することにした。妊婦指導時に助産師がオーダーしているが業務の効率化が図れているのか明確にする。

【方法】(1) 職種毎の電子カルテアクセス時間調査
 (2) 助産師に対し業務分担の利点欠点についてアンケート調査を行った。

【結果】妊娠36週1日の妊婦の健康診査時のアクセス時間を例示する。(1) 産婦人科受付事務15秒、(2) 15分後に検査部受付事務13秒、(3) 採血し21分後にNST室で助産師受付5分47秒、(4) NSTを実施し51分後に医師(エコー、診察)10分46秒、(5) 43分後に助産師(保健指導)6分32秒、(6) 5分後に事務受付6秒であった。医師の負担は検査オーダーの分だけ減少した。アンケート調査によると、外来保健指導時間の平均は14.4分、代行オーダーに要した時間の平均は6.7分であった。代行オーダーの利点は、(1) 妊婦にとっては検査日程などの融通がきくようになった53.3%、(2) 検査結果など気にするようになった46.7%、(3) 自分たちでオーダーできるようになった40.0%、などであった。欠点は、(1) 本来の保健指導の時間が減った93.3%、(2) 検査の日程希望や変更依頼が増えた86.7%、(3) 検査オーダーであるので責任が大きい73.3%、(4) オーダー入力を行うため保健指導の待ち時間が増えた66.7%、であった。

【結語】妊婦健診時の職員の業務量が把握でき、医師診察後の待ち時間が長いことが鮮明になった。医師の負担が軽減したために、レジデント・助産師の希望であった分娩予約数の増加が可能となった。

Y4-16

併設型2病院5年間のあゆみ 「夜間休日の看護管理から見たこと」

神戸赤十字病院
 ○鎌田 八重子、高田 ゆかり、大橋 美奈子、
 国出 和子、坂根 千絵

【はじめに】平成15年8月、神戸赤十字病院と兵庫県災害医療センターは、阪神淡路大震災を教訓に併設型施設として設立された。夜間・休日の看護管理は、2施設の師長・係長が1名で担っている。開設から5年間の管理当直を通して、見えてきた問題への取り組みと、今後の課題を報告する。

【問題点とその取り組み】1. 災害医療センターからの夜間休日の転院調整が多かった 安全な医療の提供のために、計画的な転院調整をすることで夜間・休日の転院を減らした。2. 慢性期病院から急性期病院への移行によるスタッフのスキルアップと教育体制の不備 新病院になって高度な技術を要する手術や検査などに対応出来るスタッフが限られており、呼び出し対応をしていた。そこで、院内で継続的な手術室研修を実施した。3. 管理当直マニュアルが実践に即していなかった 開院時作成したマニュアルを合同師長会で実践に即した内容に検討した。4. 災害発生時の対応が2施設で異なる 院内火災訓練、多数傷病者受け入れ訓練を通し、2施設で連携すべきことを検証した。マニュアルをもとに管理当直者の役割を認識した。5. 管理能力の未熟な係長が当直業務している係長が管理当直をする際、申し送り時に指導をし、対応の確認をするなど係長の管理当直を支援している。

【おわりに】今後は両施設で関わる内容については統一したマニュアルの作成が必要。災害医療センターから日赤での手術室研修は確立されたが、両施設で必要な研修に関しては取り入れていくことが望まれる。災害発生時は、管理当直者だけでなく組織全体で体制を整える。係長の管理教育は今後の課題として取り組む。